

Diversity makes all the difference –

すべてを理解しようとせず、違いを楽しむ

ライラ・カセムさん Laila Cassim /グラフィックデザイナー

福祉の世界を超えて一般の社会との繋がりを強化する。そして何よりも福祉という現場のあり方を問い直すことで、社会を問い直していける糸口になると思っています。社会は共に生きるため、ではなく、違いを認め合い楽しみながら共存するためにある—— そのことの大切さが、福祉の世界を通して見えてくるのではないかな——



かながわ国際交流財団では、神奈川県内4館の公立美術館の館長・学芸員やアートフェスティバルの実行委員等呼びかけ、「すべての地域住民」の「ミュージアムへのアクセス」を目的としたプロジェクト「マルパ (MULPA)」(6ページ参照)を昨年度より立ち上げました。マルパの最初のイベントとなるフォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」で、ゲストとしてお迎えする、グラフィックデザイナーのライラ・カセムさんに、障害者福祉施設においてアートを活用して、利用者さんの社会参加と経済自立につなげる取組みや、そうした活動のきっかけとなる体験などについてお聞きました。

「私にはその資格がないと思った」という障害者の言葉

——今の活動につながるアートの原体験とはどんなものだったのでしょうか？

大学を卒業した年がリーマンショックとちょうど重なったこともあり、当時仕事探しに苦労していました。週5,000円ほどでデザイン事務所のインターンなどをしながら、職場も転々としていました。

もともと私は、多様で複雑な情報をどのように視覚的に伝えるか、ということにすごく重点を置いていて、視覚言語にとっても関心をもっていました。また商業とは違った形でグラフィックデザ

インを何か活用できないか、ということを常に考えていました。

仕事を探している合間に、インクルーシブデザイン(※1)に取り組んでいる母(ジュリア・カセム)に誘われ、2009年にサラエボで聴覚障害がある人たちが雇われている工房を訪れました。サラエボは紛争の後に聴覚障害の人が非常に増えたことで、政府が聴覚障害者は障害者として認定しないこと、としました。「あなたたちは体も動かし、十分な学習能力もあるのだから障害者ではない」ということを理由に、聴覚障害がある人が通う工房への公的資金がカットされました。

ただこれからどうしていくのか、という対策も未来絵図も、指示もなかったところに、その工房の人たちの技術とデザインを掛

け合わせて、何か新しい商品を作ろう、と当時のプロジェクトに母がリーダーを務めました（※2）。

工房で働く聴覚障害を持った印刷技師の人が、いつもちょこまか歩いていた、時々車いすを使ったりしている私を見て、「あなたは1人で暮らしているの?」「大学も行ったの?」「へえ、すごいね」「私も大学、行きたかったんだ」と。私が「じゃあ何で行けなかったの?」と尋ねたら、「私にはその資格がないと思った（I didn't think I had the right）」と、その言葉を聞いて呆然とし、悔しさや怒り、無念、いろんな感情が私の中に巻き起こりました。

障害者に対して、支援者の皆さんが何かを提供するだけ、という社会の枠組みだけではなく、障害者自身が自らの可能性を広げていくことがとても大事な、と感じ、また何かそれにかかわるデザイン活動ができないかと考えました。

そこにある資源で社会的・文化的な価値や経済的な利益を

サラエボでのプロジェクト自体は成功を収めました、印刷技術者との会話がその後もずっと自分の中で残っていて、自分なりにその事に向き合い、問題に取り組んでいきたい、と思い東京藝術大学の大学院に入ることを決めました。

ただ、私自身の作品を作りたい、見て欲しい、という強い思いも当時はなく、制作にも迷いはありました。その一方で、自分が持っている技術を使いたい、という気持ちはあり、研究室で日々デザインのトレーニングを重ねながら、その技術によって何ができるのか、ということを考えていました。

そんな中、2012年にクロアチアで、サラエボと同じように知的障害のある人を雇っている生活介護施設での5日間のデザインワークショップに参加しました。そのとき、グラフィックデザインという視覚言語を作り上げる専門性と、知的障害のある人が描く有機的な線や文字、絵との相性がとても良いな、と思い、日本でもこれを実現できないかなと考えました。

施設の利用者さんに対して、画一的な作業をただあてはめるのではなく、もともとそこにある資源や可能性を探り出し、それを使ったその場所でしかできないものを作り上げられたら、その人たちの社会的、あるいは文化的な価値も生まれ、経済的な利益も生み出していけるのではないかな――

日本では欧米と比べ、一般消費者における根強いアートマーケットはまだまだ成り立っていないこともあり、グラフィックデザインを使ったそうした資源を活用した、メインストリーム（主流）にも通用するグッズ（商品）をつくることができればいいなと思いました。そして協力してくださる施設を一年間探し回り、ご縁もあり、綾瀬ひまわり園（※3）（以下ひまわり園）と何かやろう、ということになりました。

ひまわり園の利用者さんが塗っている絵をよく見ると、その線

はすごく力強く、彼らにとってアートをやることはすごく身体的なものにつながっているんですね。どちらかというと、何かを伝えたいというよりは、やりたい、出したい!という思いが強く、それがすごくいいものなんですよ。特に意味を持たない、というのが良いのかもしれません。

どうすればオーナーシップを持ってもらえるのか

ひまわり園で最初にやったのは、雛祭りを題材に描かれた絵を基に、商品のプロトタイプを作るプロジェクトでした。藝大の後輩たち、施設のスタッフ、そしてプロのデザイナーも入ったプロジェクトでしたが、結果的にどうなったかというと、成果物を見て「あら、デザイナーさんってすごいね」で終わってしまった。施設に関わる人たちが自ら商品を作り上げたという思いを抱くこともなく、つまり私は現場の変革も何もできていなかった。「私はこれができるよ」と、ただ言っていたことに気づき、そこからデザインすることを一旦やめました。

ひまわり園ではアートの時間は週2時間ほどありますが、一年間、毎週施設に通いながら、そこで生み出されるものに対して、どうすれば現場の人たちにオーナーシップを持たせられるだろうと考えました。利用者自身というよりは施設として、ここではこういうものが作られた、こんな可能性がある、ということを感じてもらうために、スタッフの皆さんと共に、（マイノリティの人たちや彼らを支援する人たちをデザインパートナーとして巻き込む）インクルーシブデザインのメソッドを軸に一緒に考えました。

インクルーシブデザインの面白さは、対比的な立場にいる人たちの知識や技術の掛け合わせでモノを作り上げる、ということです。そう考えたときに、私の専門は視覚伝達なので、こういうふうに印刷したら線や色が映えるよ、といった美術の基礎知識と、利用者さんの特徴や、コミュニケーションの取り方などの福祉の専門性を、支援スタッフの皆さんと共に掛け合わせていく。

利用者さん自身は、自分の人生の専門家であり、スタッフの皆さんと共に、試行錯誤を繰り返しながら、一人ひとりの力は違えど、それぞれの創造能力を開花できるための8つのメソッド（※4）を一緒に考えました。

そのメソッドを実践していくと、アートの質もすごく良くなって、スタッフの皆さんも、「こんなことができるんじゃないか、あんなことができるんじゃないか」「この柄を、ポストカードにしたらいいんじゃないか」といったアイディアも出てきました。そこで初めて、商品を作り始めてから今に至り、精力的に継続しています。

こうした活動を通して、私がおもしろいと思っている人たちの、普段、日の目を浴びない視点や成果物などが、みんなの（社会の）日常生活の風景の中に溶け込んでいくといいなと思うし、それが



文化への貢献にもつながるのではないかと考えています。

ギャラリーや美術館だけではリミットがあると感じている一方で、デザインが加わることで、1のものを100にできるし、場合によっては持続的なお金を生み出すこともできる。デザイナーなので従来の福祉の世界とかけ離れたところに持って行きたい。クオリティーも妥協せずに、つねにメインストリームにどうスモークミラーを立てずに“Rawness”（“生”の状態）を見せられるか、を追求しています。

そうした絵や作品を見ていただければ、今のデジタル時代において鈍くなっている身体的な感覚が取り戻されるようなもの、「これかわいいー」だけではなく「なんかこれいいわー」という感情的に訴えられるもの、になるように心がけています。

デザインを使ってその人ができることを広げていく

福祉や介護という世界を、施設の利用者さんのニーズに寄り添いお世話をする対象として見るだけでなく、その人の可能性を広げていくことをサポートしていくという、エンパワメントの側面も見せていただければと思います。

そのためにも、施設で働くスタッフの方々にも、アートを使った支援技術があると、より日常活動として広がるし、私のようなデザイナーが施設にすることで、相乗効果が生まれて「じゃあ、これやろう、あれやろう」と、そこでの独自の価値観も生まれてくる。

彼らのアートは、芸術の世界で言えば、とても極端なところにあります。彼らにとって別にアートそのものが特別な意味をもっていないなくてもよいし、もっと純粋なものだと思います。頭と心、身体と心が直結しているといいますか。絵を描くのが素直に楽しい、という人もいたり、単にガシャガシャとなぐり書きしているのが好きな人がいたり。

いつも私の学生たちには、「今後、福祉に関わらなくてもいいけど、一度は福祉の現場を見たほうがいい」と言っています。それは、自分の日常とかけ離れたところを見ることで初めて、デザイナーあるいは芸術家としての自分、さらには一人の人間としての自分の姿がよく見えてくるからです。

周りから「いいことしてるね」と言われることもありますが、私はその意識がまったくなく、楽しんでやらせていただいている。おもしろいからやっているだけ。

現実には、社会福祉の現場でデザインの仕事をしても、お金がまわっていない。関わっている人たちのほとんどはプロボノとしてやっている。だからこそ現場の人々よりフェアな立場に立って、「あなたはこの専門だからここをやって、わたしはこっちを担当するから」という形で協力して、新しいソーシャルビジネスのモデルを作っていく、というのが現在の目標です。

福祉という現場の変革。福祉の現場で、デザイナーがより活動しやすくなってほしい、という願いもあります。誰でもある程度のグラフィックのスキルを得られる時代に、デザイナーが商業だけではない、現場で自身のスキルを発揮できる場所がもっとあってほしいと思う。

そのために、今はさまざまな福祉施設の現場に行って、そのスタッフさんなどにアートを通した支援の方法を伝授しています。アートの支援ができるスタッフが増えれば、デザイナーも共同で関わりやすくなるでしょうし、そうすることで、福祉の世界を超えて一般の社会との繋がりも増えてくる。そして何よりも福祉という現場のあり方を今一度問い直すことで、社会を問い直していける糸口になると思っています。

美術館に対する想い（多様性に溢れる場所）

私はライブとかフェスに行くのがとても好きです。それは、も

もちろん根本に音楽を愛するという気持ちもありますが、普段出会わない人たちとの出会いの場所だからです。美術館もそんな場所であつたらいいなと思っています。

アートを見て興奮して飛び跳ねたり叫んでいる自閉症や発達障害の人、障害のある人、海外の人やホームレスなど、そこに行けば、「この世界ってすごくおもしろい人たち、いろんな人がいるんだな」と多様性を感じられる場所。

クロアチアのザグレブに「Museum of Broken Relationships」という美術館があって、とても大好きな美術館です。「Broken Relationships」とは、「決裂した関係性」という意味ですが、ここは離婚することになった夫婦が始めた美術館です。離婚するにあたって、どちらが何を持って出るか、分別をやっているときに、それぞれのモノ自体に独特の歴史やストーリーがあるよね、ということに気づき、そのきっかけから始めたそうです。

例えば、ちょっとした棚でも「そういえば、あのとき、ここで頭をぶつけたよね」といったストーリーがあつたり。鍵や洗濯ばさみでも、どれ一つとっても、別にスペシャルなものではないけれど、それぞれにストーリーがあります。そのストーリーとともに展示するものを世界中から募集している、というのが特徴です。

それぞれの物にその人なりのストーリーと歴史があつて、それはその人にしか語れないものがある、というところが私はとても好きです。いろんな人がいて、いろんなものがあり、無限の解釈の仕方があるということを感じさせてくれる美術館です。

東日本大震災で感じたこと

私は日本で育ち、その後イギリスにも行き、大人になってから日本に帰ってきて、今年7年目になり、合わせて20年間日本にいます。2012年3月に大学院を修了し、その前の年に東日本大震災が起きました。

当時、大学でも私たちには何ができるだろうと話し合いをしましたが、何をしてもしょうがないという学生が多く、制作についても、震災というものではなくても、社会や人、そういうものを題材にした作品がすごく少なかった。あんなに大きな災害が起きたのに、価値観を含めて本当は何も変わっていないことにものすごく驚き、そして残念な思いを抱きました。

日本では、何かをやりたいけど、どうすればいいかわからない人が多いのだらうなとも思っています。いわばアクションの仕方がわからない。例えば電車などで、妊婦さんなど明らかに目の前の人が困っているのに席を譲らない人たちが多くですよね。

イギリスで10年以上暮らしていた感覚からすると、すごくイライラしてしまうのですが（笑）、日本人の友達に聞くと、助けたいという気持ちはあるけど、どうしたらいいかわからないという気持ちが前に出ている、と。

でも、それは実はとても寂しいことだなと感じています。だか

らこそ、繰り返しになりますが、一生のうちで一回は福祉の現場を見ておいたほうがいいと思います。そこでは本当に自分のことはどうでもよくなるんですよ。その現場があまりにも多様性にあふれていて、一人ひとりの個性が見えて、おもしろくて、いろんなことを考えさせてくれるから。

日本人の多くは、自分の身の回りの多様性に気づいていないのではないのでしょうか。同じ日本人という外見だけでも、一人ひとりには違うストーリーもあるし、それにもっと気づくことができる世の中になればいいな、と思っています。

自分と違う人間が身近にいることに気づくことから

障害があるとどうしてもそれがその人の固有名詞になってしまふ。例えば日本で障害やダイバーシティに関するセミナーなどに行っても、会場で障害がある人が質問するときに、「何々障害のある〇〇です」と言うけど、それはわざわざ言わなくてもいいんじゃない？、と思うときがあります。

私自身は何でそう思えるかというと、両親がいろんな世界を私に見せてくれたということもありますし、私はどこに行っても人と違うなということを感じています。女性であること、人種もミックスだし、障害もあつて、マイノリティな存在なので、自分を“一人国連”と呼ぶこともありますよ（笑）。

私の中では、「人って一生わかり合えない」という結論になっていて、でも違うからこそ社会も家族一人ひとりとてもおもしろい、と思っています。私の家の中では、人種の違いや、イギリスと南アジアという異なる2つの文化が常にあつたし、私は障害があるし、家族も一人ひとり人間として違ってしています。

人の違いを楽しめること。自分と他人とは違ってていい、と認めること――

他人は自分と違ってることこそおもしろいと思えること。そのために自分の身の回りにどれだけ自分とまったく違う人間がいるかに気づけるか、ということ――

一般社会という場所から離されてしまっている人々（社会的弱者）が、私たちの日常の風景にすることで、それが初めて可能になると思います。そのために今、多様な分野でいろんな人がインクルージョン（包摂と調和）を実現しようとしているのだと思います。

共に生きるため、ではなく、違ってることこそ共存し、混じり合うために。人間なんて一生分かり合えない。分かりあおうとすればするほどイライラする・・・それは結局すべてがわかりきれないから。家族で同じ血を引いてるからと言って同じということでもない・・・ そうだとしたら、いろんな人が混じり合っている現実が目の前にあれば、違いを認め合うことの大切さに気づいてモヤモヤしたものも吹っ切れるし、もっと楽になるんじゃないかな、と信じています。

※1 インクルーシブデザイン

人それぞれの多様性と違いを理解するためのデザインプロセス。普段メインストリームのデザインの対象とされない障害者や高齢者といったマイノリティの人々をユーザーではなくデザインパートナーとして巻き込むデザインプロセス。単なるプロダクトやサービス開発の手段ではなく、より多様な人々が活用できるデザインを生み出し社会をより豊かなものにするのが目的である。

※2 オールインクルーシブサラエボ2009 (All Inclusive Sarajevo 2009)

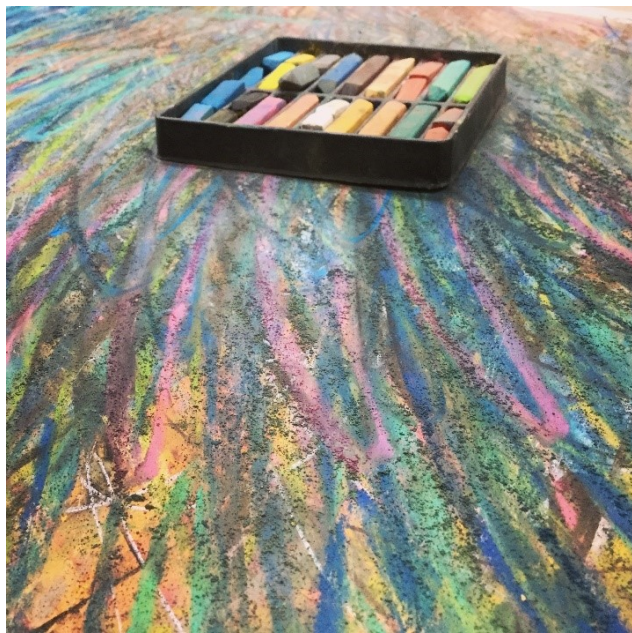
サラエボ出身のプロダクトデザイナー、ナタシャ・ペルコビッチとジュリアカセムが協働し、プリティッシュカウンスル協賛のもと開催されたプロジェクト。5日間にわたり、イギリス出身の5人のデザイナーがリーダーとなりそれぞれ4つの聴覚障害者の職人が雇われている工房と地元デザイナーと学生とチームを組み5日間に渡って新しいデザイン商品のプロトタイプを作り上げたワークショップ。

※3 綾瀬ひまわり園

東京都足立区にある「社会福祉法人あだちの里」が経営する通所型の社会福祉施設で、就労A型、B型、生活介護事業を行っている。利用者は軽度から重度の知的障害者90名ほど。ライラさんは、2015年からアート講師として毎週ひまわり園に通い、一人ひとりに寄り添いながら、それぞれの才能を開花させる「8つの方法」をスタッフと開発。現在も毎週アート講師を継続中。

※4 創造能力を開花させる8つの方法 (8 Methods for Creative Growth)

障害や年齢、造形能力を問わず、誰でも使える創造能力を開発するための方法。
www.lailacassim.com/8methods



綾瀬ひまわり園で制作されているアート作品の1つ



綾瀬ひまわり園の利用者の絵を活用した柄のクッション

プロフィール / ライラ・カセム Laila Cassim



英国出身、日本育ちのグラフィックデザイナー。2016年に東京藝術大学大学院デザイン科の博士課程を修了し、現在は東京大学先端科学技術研究センターに特任助教として所属。

社会から取り残されたグループのエンパワメントにインクルーシブデザインのプロセスと視覚伝達デザインのスキルをツールとして利用することに力を入れて、作品制作と研究に取り組んでいる。現在は足立区の障害福祉施設で定期的に講師をし、そのアートを活用して、利用者の社会参加と経済自立につながるアート作品の制作と商品づくりの開発に取り組んでいる。

また、東京大学先端科学技術研究センター特任助教として、突出した能力はあるものの現状の教育環境に馴染めず、不登校傾向にある小・中学校生の継続的な学習保障及び生活のサポートを提供するプログラム「異才発掘プロジェクト ROCKET」にも関わっている。

語られなかった横顔

◆好きな画家・作品：

ひまわり園と他施設のアートとアールブリュットは殿堂入りとして・・・
Alan Fletcher と Louise Bourgeois - 遊び心と終わらぬ追求心 / ビースシンボル / ツアイ・グォチャン (中国人作家)

◆好きな時間の過ごし方：

ぼーっと散歩すること、友達とバカ笑いすること、あと料理ですかね。美術館だったりライブに行くことも好きです。だから要するに、ぼーっとしてガーって騒ぐことを繰り返すことです (笑)。

◆座右の銘：

なんとかなる → 諦め、妥協と経験から

◆日本で好きな場所：

どこでもない田舎の風景を見ると落ち着きます。

(東京大学先端科学技術研究センターにてインタビュー／2017年4月)

マルパとは？

MULPA : Museum UnLearning Program for ALL / みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—

●神奈川県内4館の公立美術館の館長・学芸員やアートフェスティバルの実行委員等がかながわ国際交流財団の呼びかけで集い、「すべての地域住民」の「ミュージアムへのアクセス」を目的としたプロジェクト「マルパ (MULPA : Museum UnLearning Program for ALL / みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—)」を昨年度より立ち上げました。

マルパは多様性を認め合う社会を目指して、美術館の教育普及事業をどのように展開すべきかを検討していきます。オリンピックイヤーである2020年に向けては、美術館が本当の意味で地域のハブとなるよう、「社会を包む」ワークショップ等を参加館で実施していく予定です。マルパの最初のイベントとなるフォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」(以下)では、美術館を訪れることに困難を感じている障がい者や定住外国人の方々と、美術館の楽しみ方について真剣にそして楽しく語り合うワールド・カフェを行います。

●フォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」/2017年7月8日(土) @関東学院大学関内メディアセンター



【第I部】オープニングトーク「障がいを超えるアートプログラム・美術館とは？」

- ・ファシリテーター/伊藤亜紗(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授)
- ・ゲストスピーカー/
ライラ・カセム(グラフィックデザイナー・東京大学先端科学技術研究センター特任助教)
光島貴之(美術家・鍼灸師)

【第II部】ワールド・カフェ「みんなで楽しめるアートプログラム・美術館とは？」

●マルパ運営委員 (50音順)

小川稔(茅ヶ崎市美術館長) 草薙奈津子(平塚市美術館長) 佐々木暢行(横須賀市教育委員会美術館運営課長) 鈴木理恵子(女子美術大学准教授) 水沢勉(神奈川県立近代美術館長、座長) 山崎穂恵(相模湾・三浦半島アートリンク代表/関東学院大学教授)

●マルパ作業部会員 (50音順)

岩井成昭(イミグレーション・ミュージアム東京主宰/秋田公立美術大学教授) 江口恒明(平塚市美術館主査兼学芸員) 海老原周子(一般社団法人 Kuriya 代表) 兼子朋也(相模湾・三浦半島アートリンク推進委員/関東学院大学准教授) 工藤香澄(横須賀美術館学芸主査) 三本松倫代(神奈川県立近代美術館主任学芸員) 高嶋雄一郎(神奈川県立近代美術館主任学芸員) 立浪佐和子(横須賀美術館主任学芸員) 平井宏典(相模湾・三浦半島アートリンク推進委員/和光大学准教授) 藤川悠(茅ヶ崎市美術館学芸員) 杉山昌夫(神奈川県立近代美術館主任学芸員)

かながわ国際交流財団 (KIF : Kanagawa International Foundation)

神奈川県内で国際交流・協力を推進する中核組織として1977年に設立されました。2012年4月に公益財団法人の認定を受けています。「多様性を尊重する“かながわ”の人づくり・地域づくり」を重点目標として、神奈川県、県内自治体、国際交流協会、NGO/NPO、教育機関、福祉関係団体、企業などと連携しながら事業を実施しています。



【事務所】

本部/湘南国際村学術研究センター 〒240-0198 葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内
TEL:046-855-1820~1822 FAX:046-858-1210 E-mail: shonan@kifjp.org
横浜事務所/多言語支援センター 〒221-0835 横浜市中区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター13階
TEL:045-620-0011 (代表) FAX:045-620-0025 E-mail: tabunka@kifjp.org

※多様性が活きる神奈川のために～ご寄付のお願い～

4つの分野から指定できます。

- ①多文化共生の地域社会かながわづくり
- ②県民・NGOとの連携・協働による国際活動の促進
- ③国際性豊かな人材の育成
- ④学術・文化交流を通じた地域からの将来像の提案

振込先(郵便振替)

ゆうちょ銀行 00280-4-49894 公益財団法人かながわ国際交流財団

※通信欄にご希望の事業番号(①～④)をお書きください。ご寄付には税制上の優遇措置が受けられます。

クレジットカード・銀行振込でもご寄付いただけます。

お問い合わせ

寄付担当 TEL : 046-855-1820 E-mail: donation@kifjp.org